

奈良県立医科大学 学報



CONTENTS

被災地への学生ボランティアについて	1
早稲田大学との連携強化／白檀生祭	2
平成22年度決算について	3
平成24年度入試日程／解剖慰霊祭／実験動物慰霊祭	4
オープンキャンパスを実施／ひらめき☆ときめきサイエンスを実施	5
クラブ紹介	6
西医体について	7
茶道部／バングラデシュの無医村への医療援助	8
図書館だより	9
研究紹介	10, 11
産学官連携だより	12, 13
高度医療技術修得者養成について／ペインセンターについて	14
施設の改修について	
チェンマイ大学との交流について／地域看護学実習について	15
看護現場の体験	
看護部から	16, 17
医療倫理講習会の開催／女性研究者研究活動支援事業	18
教職員のための夏の公開講座を実施	
公開講座「くらしと医学」を実施	
レポート／奈良県医師会総会同医学会開催	19
なかよし保育園について／下ツ道／広告	20

October
2011

vol. 38

東日本大震災被災地福島県で学生がボランティア活動をしました（学務課）

ボランティアの被災地への往復を奈良県が支援する「災害ボランティアバス」の制度を活用して、学生20名教職員4名は、平成23年8月26日（金）から29日（火）の間、東日本大震災の被災地である福島県を訪ね、仮設住宅の集会所で行われる仮設サロンでの傾聴活動、健康調査のボランティア活動に参加、福島県立医大では災害医療、震災で福島県が受けた影響、除洗棟について講義を受け、南相馬市立総合病院長金澤先生には発災直後の同病院の医療活動について説明を受けました。福島県立医大の学生からは、被災後のボランティア活動について報告を受け、学生相互の交流会をし、今後の継続についても話合いました。

学生災害ボランティアバスに参加して

医学科1年生 中務 智彰

今回の参加学生は皆一様に出発前、自分にながができるのかという不安を持っていました。しかし、実際に集会所に集まった方の話を聞いたり、子ども達と遊んだりするなかで、被災地の現状がどうなっているか、支援のニーズがどう変化しているのを感じ取ることができ、必要とされている支援や学生としてできることが数多くあることを実感しました。

今回の活動により、「震災を風化させないでほしい」という福島医大生の想いを伝えたい、福島県や福島医大に貢献したいという気持ちが強くなりました。今後は災害ボランティアのグループを立ち上げ、活動を続けていきます。一人でも多くの方に興味をもって参加していただけるような活動をしていきたいと考えています。



早稲田大学との連携強まる

2008年の12月に本学と早稲田大学が連携協力協定を結んで以来、毎年度、多様な連携事業を実施しています。

今回は、8月23日から28日まで「日本の地域医療、へき地医療の現状と将来：奈良県の現場から」をテーマに掲げ、早稲田大学の教授および学生約20名が来校し、本学からも教授および学生約20名が参加しての開催となりました。

講義は、本学の今村知明教授が「地域医療政策」、車谷典男教授が「疫学入門」を、早大からは、土田友章教授が「医療倫理」、須賀晃一教授が「医療経済学」、長谷川恵一教授が「医療経営学」、岩志和一郎教授が「医療過誤民事責任法」について、それぞれ行いました。

また、奈良県医師会副会長の竹村恵史先生には、地域臨床医の観点から、県立五條病院へき地医療支援部長の中村達先生には、へき地臨床医の観点から講演をいただきました。

8月27日から28日には場所を曽爾村に移し、両校の学生以外にも、県内の医師・看護師、行政関係者、他大学の医学生も参加した「地域医療ワークショップ」を行いました。

ワークショップでは岡山大学の佐藤勝教授に「地域ぐるみで支える医療」、曽爾村住民生活課の椿根純子保健師に「曽爾村での取り組み」をテーマに講演をいただいた後、本学教育研究センターの藤本眞一教授の進行により小グループに分かれてのグループ討論を行い、参加者はそれぞれの立場から意見を述べるなど、積極的な交流を図りました。

(平成23年度白檀生祭実行委員会)

かしふ 白檀生祭 今年のテーマは「絆」

10/28(金)～30(日)まで

いよいよ、年に一度の大学祭の季節がやってきました。今年は「絆」をテーマに、たくさんのイベントを開催致します。

主なイベントをご紹介します。

○シンポジウム 10月29日(土) 於 大講堂

タイトル：東日本大震災の医療対応～日本の未来を考える～

講師：中村仁信先生(大阪大学放射線科名誉教授 彩都友誼会病院長)

内容：第一部 奈良医大からの医療支援

西尾健治先生(総合診療科)・看護師・コメディカル・学生のボランティアによる講演

第二部 特別講師の先生による講演・パネルディスカッション

○ステージ企画 10月29日(土)・30日(日) 於 野外メインステージ

各クラブによるライブ・面白イベント等目白押しです！！

○模擬店 10月29日(土)・30日(日) 於 一般教育校舎南側

○メインイベント 10月30日(日) 於 体育館

「佐藤健トークショー」

入場料：S席1500円 A席1000円

○バザー 10月29日(土)・30日(日) 於 大講堂前

・東北大震災復興チャリティーバザー

・福島応援企画「福島ミニ物産展」

○献血 10月29日(土) 於 駐輪場



白檀生祭の運営にあたっては、教職員の方々や同窓会の多大なるご援助をいただいております。

この場をおかりしてお礼申し上げますとともに、今後もよりよい白檀生祭を目指してまいりますので、何卒ご協力の方お願いいたします。

皆様のお越しを心よりお待ちしております。

公立大学法人奈良県立医科大学

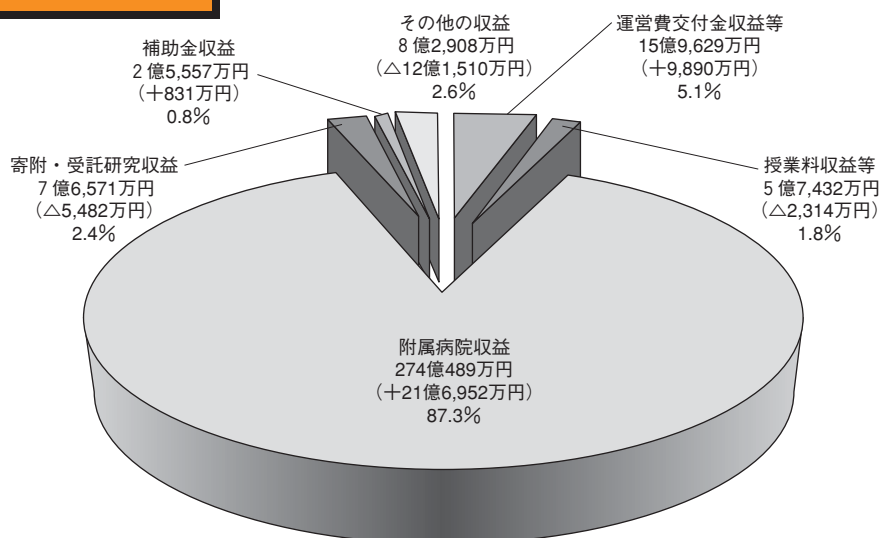
平成22年度決算

平成22年度決算は、収益 314億2,586万円、費用 309億691万円です。法人化後はじめて差引 **5億1,895万円の黒字決算** となりました。

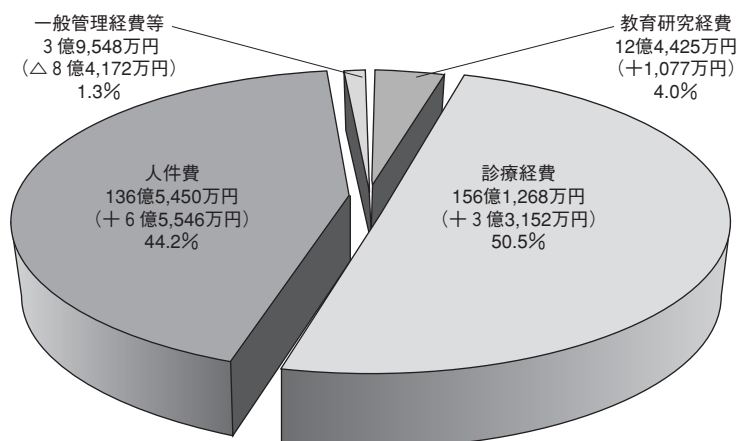
(参考:平成21年度 収益 304億4,219万円 費用 307億5,088万円 差引 3億869万円の赤字)

※ ()内は前年との増減額

収益 314億2,586万円



費用 309億691万円



注：運営費交付金収益等には、政策医療推進費補助金（5億4,940万円）が含まれます。
 ：その他の収益、一般管理経費が前年度に比べ大幅に減少しているのは、減価償却に伴う特別な会計処理を行ったためです。

平成22年度は附属病院収益の増収などにより黒字となり、累積赤字は縮小しました。
 (累積赤字 21年度 18億215万円 → 22年度 12億8,319万円)

このように経営状況は改善しましたが、今後は病院新棟建設等により費用負担の増加が見込まれますので、皆さんには引き続き収入の確保、経費節減等のご協力をよろしくお願い申し上げます。



平成24年度 入試日程

(学務課)

医学部

学科	入試区分	募集定員	出願期間	試験日	合格者発表
医学科	推薦*1	28	平成23年12月13日(火) ～12月16日(金)	平成24年 2月5日(日)	平成24年 2月8日(水)
医学科	前期	65	平成24年1月23日(月) ～2月1日(水)	平成24年 2月25日(土) 2月26日(日)	平成24年 3月7日(水)
医学科	後期*2	20		平成24年 3月12日(月)	平成24年 3月21日(水)
看護学科	推薦*3 社会人	30	平成23年11月1日(火) ・11月2日(水)	11月26日(土)	12月13日(火)
看護学科	前期	40	平成24年1月23日(月) ～2月1日(水)	平成24年 2月25日(土) 2月26日(日)	平成24年 3月7日(水)
看護学科	後期*4	10		平成24年 3月13日(火)	平成24年 3月21日(水)

- *1 看護学科推薦・社会人入試は、「推薦選抜」(25名)と「社会人特別選抜」(5名)を実施します。「推薦選抜」は文部科学省に募集人員増(5名)を申請中で、承認されれば募集人員が、30名に増える予定です。
- *2 医学科後期日程の募集人員には地域枠(10名)を含みます。
- *3 看護学科推薦・社会人入試は「推薦選抜」(25名)と「社会人特別選抜」(5名)を実施します。「推薦選抜」は文部科学省に募集人員増(5名)を申請中で、承認されれば募集人員が30名に増える予定です。
- *4 看護学科の後期日程は地域枠のみ募集します。
詳しくはホームページで確認してください(<http://www.narmed-u.ac.jp/jyuku/>)
なお、看護学科の推薦・社会人入試募集要項は学務課で配布中です。
医学科推薦入試募集要項は10月下旬、その他の募集要項は11月下旬から配布予定です。

第65回 解剖慰霊祭が厳かに挙行されました

平成23年9月22日(木)午後3時から大講堂において、第65回解剖慰霊祭が執り行われました。系統解剖及び病理解剖に貴重なご遺体を提供していただいた方々のご遺族や、献体登録を申し出ている方々、奈良医大白菊会会員、来賓の方々、教職員、学生等、合わせて約400名の方々が参列されました。

今年は新たに、系統解剖33柱、病理解剖39柱の計72柱を加えて、5986柱の御霊をお祀りさせていただきました。参列者全員の黙祷の後、学長の祭文奉読、学生を代表して医学科3年生総代の柴田浩気さんからの感謝文奉読、参列者の献花と続き、最後に学長からのお礼の挨拶で終了しました。

医師、看護師を志す者にとって解剖実習を通じ人体の構造を知ることが神聖かつ重要な学習です。尊い意思を持ち、医学の発展と医学教育のために自らのご遺体を捧げてくださった皆様方と御遺族の方々に改めて深い感謝の意を表しますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

実験動物慰霊祭が厳かに挙行されました

実験動物慰霊祭を9月26日(月)に行いました。これは、実験動物の尊い生命に対し、哀悼の意を表すもので、毎年実施しています。

学長の祭文朗読後、多くの関係教職員及び学生が献花を行いました。

私たち生命医学に携わる者は、動物の生命を尊重する必要がありますが、やむなく動物実験を必要と判断したときは、動物に対して博愛的な敬愛を払うという道徳上の義務を失うことなく、犠牲になる動物数の削減に努め、動物の生命から得られた貴重な情報を研究成果として広く社会に還元できるよう努めなければなりません。



オープンキャンパス盛大に開催

8月6日(土)と7日(日)にオープンキャンパスを開催しました。

医学科(6日)は約580名、看護学科(7日)は約420名と、2日間で参加者は1000名に達し、また関東を初め全国各地からの参加が見られるなど、本学の人気の高さを改めて実感しました。特に中島教授(6日「iPS細胞からの臓器分化誘導」、石澤教授(7日「看護における皮膚管理-褥瘡と失禁-」)による模擬講義では大講堂が一時満席状態になる盛況ぶりでした。

先着順に受付を行った施設見学(先端医学研究機構、附属図書館、看護学校舎、附属病院など)もすぐに定員に達し、実際に体験したり説明を聞くことで大学の雰囲気を感じたと、参加者も満足した様子でした。「先輩からのメッセージ」には、在校生に加え本学附属病院の臨床研修医及び看護師に参加していただき、先輩として、また現役の医師・看護師としてのコメントをいただきました。そのほかには、本学が連携協定を結んでいる各大学の紹介(パネル展示・資料配付)や、栗田書店の協力による教科書展示コーナーなどを設け、担当者や学生が説明を行いました。

オープンキャンパス実施については、学長・医学部長をはじめ、教職員、学生ボランティアなど数多くの皆様のご協力をいただき、大盛況で終わることができました。これらの皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともご協力をお願いいたします。



吉岡学長による講演



看護実習室での体験

(研究推進課)

小・中・高校生のための
プログラム



KAKENHI

ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI (研究成果の社会還元・普及事業) を実施しました

「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI (研究成果の社会還元・普及事業)」を8月6日(土)、7日(日)(本学オープンキャンパスと同時日)に実施しました。

この事業は、大学で行っている最先端の科学研究費補助金による研究成果について、小学校5・6年生、中学生、高校生の皆さんが、直に見る、聞く、触れることで、科学のおもしろさを感じてもらおうプログラムで、独立行政法人日本学術振興会の委託事業として採択を受け実施するものです。

本学では、高校生(2・3年生の女子)を対象として、「生命の神秘と誕生ー赤ちゃんの発育と子宮の病気ー」(実施代表者:産婦人科学 小林 浩教授)と題したプログラムを実施し、8月6日 20名、7日 21名が受講しました。

プログラムでは、若い女性がかかりやすい子宮の病気の原因とその予防などについての講義や胎児超音波をシミュレーション機器を用いて自分で体験できる実習などを実施しました。受講生たちは、講義や実習を通して、子宮の中で育っていく赤ちゃんを観察し、生命の尊さや子宮の大切さを学び、どのようにしたら大切な子宮を病気から守ることができるかを自ら考えました。



熱心に耳を傾ける受講生



シミュレーション機器で胎児超音波を体験

本学の学生は、勉強だけをしているわけではありません。
 多くの学生は、文化系12部、体育系24部のうちのいずれかのクラブに所属しています。そして、心身を鍛え、交友を深め、青春を謳歌しています。
 さて第6回のクラブ紹介は、社会医学研究会と陸上競技部です。



社会医学研究会 「自由に真剣に」

部 員:115名
 顧 問:古家 仁(麻醉科教授)
 部 長:畑中 彩季(3年)
 活動内容:ボランティア、海外留学、勉強会
 練習 日:不定期

「しゃ〜いけ〜ん♪」の愛称で親しまれている社会医学研究会は、顧問を麻醉科学教授の古家仁先生にお引き受けいただき、数多くのOB・OGの方々を輩出してきました。以下に主な活動を紹介いたします。

- ・ぬいぐるみ病院：大学近くの保育園で園児に劇やロールプレイングを通して保健教育します。
- ・みの虫、てくてくの会：奈良、京都で障害を抱えた子供とその家族の会。交流やお手伝いをします。
- ・ホスピスボランティア：国保中央病院の緩和ホームの患者さんが少しでも最期まで快適に過ごしてもらえればとお手伝いしています。
- ・花の家ボランティア：橿原市のデイサービス施設で老人の方と話したり体を動かして遊んだりして過ごしています。
- ・IFMSA(国際医学生連盟)、AMSA(アジア医学生連絡協議会):日本中、世界中の医療系学生が集まり国際会議や様々なプロジェクト・ワークショップを通して交流します。
- ・海外留学:IFMSAを通じて臨床または基礎研究の4週間の交換留学を行っています。

私たちは、思い思いに好きな活動に参加しています。これらの活動だけでなく、手話や発達障害の勉強会など部員自らの発案で新たな活動も年々増えています。それは色んなことに興味を持って多くの知識を吸収したいという気持ちで、部員各々が各々のやり方で真剣に医学を追求しているのだと思います。ほんの少しでも大学で何かしたいと思っているあなた、普通のキャンパスライフでは得られない貴重な経験がここで出来ることでしょう。



陸上競技部 「より速く、より高く、より遠く」

部 員:30名
 顧 問:田岡 俊昭(放射線科准教授)
 主 将:中井 貴大(3年)
 活動内容:陸上競技
 練習 日:毎週月・水・金曜日の午後5時～8時頃

私たち陸上競技部は個性的な面々が揃う楽しい部活です。現在男子16名、女子14名が所属しています。趣味趣向も経歴もてんでばらばらな私たちですが、全員が1つの目標——より速く、より高く、より遠く——に向かって練習に取り組んでいます。

自分の努力が客観的な数字で表されるのは魅力の1つです。たとえ0.01秒や1cmでもベスト記録を更新できたら・・・それは昨日までの自分を超越することができた、ということ。自分の頑張ってきたことが報われた、ということ。達成感は一ひとしおです。

世界陸上やジョギングで陸上ブーム真っ只中な今、あなたもブームに乗ってみませんか？

必要な物は服と靴、アツい心のみ！！マネージャーも絶賛募集中です！！

興味を持っていただいた方はHPも是非ご覧ください。

<http://www.geocities.jp/naraitf/>

祝・準優勝！全員で戦った夏！

～第63回西医体総合2位～

今年も西日本医科学生総合体育大会が開催されました。総合成績2位と去年17位から更に大きく躍進しました。今夏は主管が近畿ブロックということで、多くの部がしっかりと実力を発揮できた結果だと思われます。

母校の名誉、日々の努力の成果を発揮するため、全力で奮闘した皆に祝福を！

- ◆期 間：平成23年7月30日～8月13日
- ◆主 管：近畿ブロック
- ◆代表主管校：大阪医科大学
- ◆参加大学数：計44大学
- ◆競 技 数：21

競 技 名		【団体】
		成績
テニス	男	2回戦敗退
	女	ベスト8
ソフトテニス	男	ベスト8
	女	初戦敗退
サッカー		2回戦敗退
準硬式野球		2回戦敗退
バスケットボール	男	ベスト8
	女	2回戦敗退
バレーボール	男	初戦敗退
	女	3位
バドミントン	男	2回戦敗退
	女	ベスト16
弓道	男	19位
	女	24位
柔道		4位
卓球	男	3回戦敗退
	女	2回戦敗退
水泳	男	200mリレー 6位
空手道	男	準優勝
	女	ベスト8
剣道	男	ベスト8
	女	3位
ハンドボール		予選リーグ敗退
ラグビー		3位
ゴルフ		24位
総合		準優勝

競 技 名		【個人】種目成績
バドミントン	女	喜多桃子 ベスト8
陸上	男	中井貴大 400mハードル5位
		服部貴憲 走高跳3位
	女	高由美 400m3位 800m2位
		呉海垂津佐 走高跳優勝
水泳	男	阪井論史 50m自由形2位
		100m自由形3位
		新見雄大 50m自由形3位
		100m自由形6位
剣道	女	青木都樹 3位

「感謝」

去る8月6,7両日に西医体空手道部門競技が榎原公苑第一体育館で開催され、僕たちの空手道部は男子団体戦準優勝、女子団体戦ベスト8、西コメ女子団体戦第3位などの結果を残すことが出来ました。

今回の西医体は大阪医大が総合主管校でしたが、空手道部門では奈良医大空手道部が主管となって運営をさせていただきました。僕たちは2年前の沖縄での西医体にて主管を依頼されてから、開催に向けて準備を進めてきました。当日は全ての部員が何らかの仕事をもち、十分に試合前にアップも出来ないままに試合に臨んだ部員もいました。

そんな困難の中、例年以上の成績を残し、運営を無事終えることが出来たのは、いつも空手道部をご指導いただき、運営の中心を担ってくださった新谷純男先生、OBOGの先生方をはじめとする本当に多くの方々に空手道部が支えられていたからだと思えます。部員もその期待に応えるべく日々稽古に励み、苦しい時には互いに支えあってきました。

そうして最後に胸を張れる結果を報告することができ、実に充実した夏になりました。

現在、空手道部は新体制のもと、再び稽古に励んでいます。今年の経験をもとに、来年はより一層の好成績を残せるように努めていきたいと思えます。本当にありがとうございました。

(主将：医学科4年 矢野 航太)



一期一会：茶道部



「一期一会」

部員:22名(男子2名、女子20名)

部長:鶴谷 実加(3年)

活動内容:茶道

練習日:水曜、木曜、土曜

私達は薬理学教授、吉栖正典先生に顧問をお引き受けいただいております。医学科・看護学科それぞれの学生が共に仲良く楽しく茶道を学んでいます。ほとんどの部員が大学から茶道を始めた人ばかりです。お稽古は大学近くの井倉宗陽先生の教室に通わせてもらっており、月に4回程は医大生向けのお稽古を開催していただき、月に数回は一般人向けのお稽古に参加してもらっています。また大学の大講堂内にある自作の畳の空間で自主練習したり、紹介していただいたお茶会に参加したりと、授業や実習で忙しくても各人が自分のペースに無理なく茶道が学べる環境を整えてもらっています。また部員のほとんどが兼部をしており、勉強もクラブもバイトも遊びも頑張る、正に文武両道をさらりとこなす部員が揃った暖かい雰囲気のある部となっています。そしてなんと来年には看護校舎に御茶室を作っていただくことになり、ますます活発な活動になることを楽しみにしています。

年間行事は、万葉ホールでのお茶会や御家元見学、短期講習会、初釜などがあり、それぞれのイベントを通して各人が目標を決めてスキルアップに励んでいます。

私達は将来医師や看護師として病める人に手をさしのべる職業に就きます。一つ一つの出会いを大切に、一人一人の人を思いやって最高の医療を提供するという意味では御茶の精神と相通じる物があると思います。そのある意味一期一会の繰り返しの場で将来働く身として、今茶道の精神にふれられていることはとても貴重だと思います。茶道を通して得た思いやりの心や人とのつながり、暖かい気持ちや豊かな精神を大切に、今後も社会で活躍していきたいと思っています。

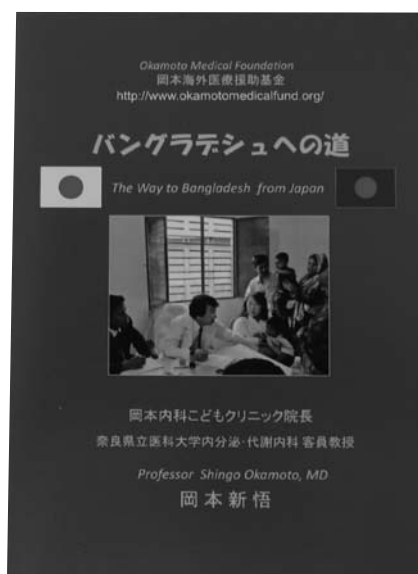
バングラデシュの無医村への医療援助から病院建設まで

奈良県立医科大学臨床教授
岡本内科こどもクリニック院長 岡本 新悟



此の度バングラデシュの無医村に寄付で病院を建設し、開院祝いに小児科医の妻と当地を訪れ診療を行った。さらに「成長障害の早期発見」について講演を行い、ノーベル平和賞受賞者であるムハマド・ユヌス教授と会談を行った。この経験がこれから本学の医師が歩もうとする中で発展途上国の医療にも眼を向けて頂けたらとの思いでここに報告することにした。

事の起りは私が本学の第三内科に奉職中、一人の留学生（ムハマド・セリム・レザ医師）を受け入れたことに始まる。彼が4年間の留学を終えて帰国するとき、彼から故郷のガジプールという人口20万人の無医村に病院を建設する資金の援助を依頼され、私の退職金の全てをその援助に充てることにした。そして此の度病院が完成し、その開院祝いに今年1月に訪問した。何百人もの村人の大歓迎を受けた後、新築された病院で家内と診察を行い貧しい村の医療の問題を身をもって経験することができた。また私の専門の「成長障害の早期発見」について講演を行い、私が考案したスクリーング法（WHAMES法）が当地の学校健診に導入されることになった。さらにノーベル平和賞受賞者のムハマド・ユヌス教授と会談し、発展途上国の今後医療について話し合い、これからは情報を交換する約束をした。以上の経緯について「バングラデシュへの道」という小冊子にまとめたので御覧頂ければ幸いです。



（「バングラデシュへの道」は学務課にあり
希望があれば無料提供します。）

連載 電子ジャーナルを使いこなそう! 第3回 シュプリンガー社「シュプリンガーリンク(SpringerLink)」

今回はシュプリンガー社(以下シ社)の「シュプリンガーリンク(SpringerLink、以下SL)」をご紹介します。

シ社は、STM分野では世界最大の出版社で、約2,600誌の電子ジャーナルおよび約50,000冊の電子ブックなどを扱っています。本学では、ジャーナル約1,900誌、ブック約4,000冊にアクセスできます。現在のプラットフォームは、昨年8月に大幅にリニューアルされ、シンプルかつわかりやすいページ構成になりました。

雑誌タイトルから探すためには、当館ホームページ「オンラインジャーナル」からのほか、SLトップページ(<http://www.springerlink.com/>)画面中央にあるタブメニューから「Journals」を選び、アルファベット順に探していきます。一覧で表示される雑誌タイトルの左側に正方形のボックスが表示され、緑色ならすべてアクセス可能、白ければ不可、緑/白2色なら一部可能を示しています(図1)。次に雑誌タイトルの一つを選ぶと、雑誌ページが開きます。ページが開くと、まず画面中央には「Online First」の論文一覧が表示されます。これはプリント版発行前の段階のもので、最新号以前の論文は左側メニューの巻・号一覧から選びます。最新号から1997年までは「Contemporary Content」を、1996年以前の古いものは「Archival Content」から選べます。また、雑誌タイトル(全部または一部)、巻・号・ページを画面上部の検索ボックスへ直接入力することにより即座に目的の論文を表示させることもできます(図2)。

アクセスできる範囲はバックナンバーをパッケージで買い取っていますので、一部を除いて創刊号からアクセスできます。

一方、電子ブックは現在、2005年発行の全分野、2006年～2009年の「Medicine」、「Behavioral Science」分野ならびに、2006年～2007年の「Biomedical & Life Sciences」分野を購入しています。SLトップページから「Books」タブを選ぶと利用可能なブック・タイトルの左側ボックスが緑色になっています。ちなみに、シ社のオンライン・ブックは当館ホームページ「所蔵資料検索」からも検索可能で、「E-BOOK」として登録されています。

ご不明な点がございましたら、担当(鈴木、内線2293)までお問い合わせ下さい。



(図1)



(図2)

日曜日も開館に!

9月18日(日)から従来の土曜日・祝日に加えて、日曜日の無人開館サービスを始めました。以前からの学生の要望に応えたものです。開館時間は、8時45分から22時まで、図書の閲覧や複写のみで、借り出しなどはできませんのでご注意ください。

玄関の出入りには当館発行のIDカード(学生は学生証)が必要ですので、お持ちでない方は平日中に利用登録を済ませてください。

「闘病記文庫」の一般貸出スタート!

本学医学科学生の要望により開設した「闘病記文庫」も3年半が経過し600冊を越えるまでになりました。「闘病記文庫」とは病気にかかった患者さんやその家族による手記などを病名別に分類して並べ、探しやすくしたものです。本学では、看護学科生に次いで、事務職の方の利用が目立っています。

この特徴あるコレクションを地域のみならず利用していただけるよう、10月3日(月)から本学附属病院へ通院、入院されている方を対象に貸出サービスを始めます。当院の診察券をお持ちであれば、簡単な登録手続で闘病記を5冊まで2週間借りることができます。

入院等で来館できない場合は、代理の方による利用申請も受け付けますので、詳しくは図書館(内線2294)までお問い合わせください。

病理診断学は面白い! 40年間の大学と24年間の病理医生活を振り返って

病理診断学 教授 野々村 昭孝



私は、学園紛争最中の昭和46年卒業で、医局は崩壊、卒後臨床教育不在で、将来外科医になるつもりで大学院(病理)に入学したのが病理医になったきっかけである。

病理学教室は実験病理で肝臓の免疫病理を研究し、動物や培養細胞を用いた実験に明け暮れた。その頃の研究のキーワードは、細胞障害性T細胞、ADCC、NK細胞活性、HBs抗原反応性T細胞クローンである。昭和62年に附属病院に病理部が新設されたのを機に、16年間居た基礎病理学教室から専任助教授として病理部に転出、そこから病理医としての私の大学生生活が始まり、24年が経過したことになる。

病理部では、基礎病理での免疫性胆管障害の実験的研究を続けるとともに、非アルコール性脂肪性肝炎(NASH)の研究を開始し、病理診断をする中で肝血管筋脂肪腫(AML)の症例に遭遇したのを機に、AMLに興味を持つようになった。というのも、AMLは血管、平滑筋、脂肪からなり、何故かメラノーマ特異抗体であるHMB-45にも染まり、当初は過誤腫とも考えられた奇妙な腫瘍だからである。しかも、ほとんど良性であるにもかかわらず、平滑筋成分の形態が多彩でしばしば細胞異型を示し、別の悪性腫瘍と誤診断されて過剰な治療がされるなど、AMLは病理診断に難渋する“病理医泣かせ”の腫瘍として有名であった。その後、全国からAML症例を収集し、その病理形態を分析、報告してからは、その実態が広く知られるようになり、病理診断に迷うことも少なくなった。

2003年に本学の病理診断学講座に着任し、病理部を包括することになった。当時の吉田修学長に最初にお会いした時に「奈良県は病理医が少ないから是非一人でも多くの病理医を育ててほしい」と言われた。病理に興味を持ってもらうように学生教育に力を入れるとともに、NASHの研究、肝AMLの研究は継続した。おもしろいことに、約7割の肝AMLで、悪性腫瘍の指標である門脈域や肝実質への浸潤増生が見られる。肝AMLの7割は悪性か?と言うと、これまで200余例の肝AMLのうち遠隔転移を来したのはたった3例で、その組織像を見ても転移のない症例と区別ができない。このように組織像のみでは良悪性の区別がつかない腫瘍が多く知られている。GIST然りである。良性の子宮筋腫の中には肺に転移するものがある。これは病理総論に反して“benign metastasizing leiomyoma”と呼ばれる。内分泌臓器や神経内分泌臓器の腫瘍は良悪性の判断が難しい。甲状腺の濾胞状腺腫と濾胞癌は細胞形態で区別できない。実際は、転移して初めて悪性と言える腫瘍である。病理医は良性と悪性腫瘍とを経験的に細胞や増殖形態から区別しているが、これに当てはまらない良悪の区別の難し腫瘍がだんだんと増えている。AMLもこのような腫瘍の一つと思われる。実際は、良・悪性は腫瘍として一連のもので、その厳密な区別はないのかも知れない。良性とされる腫瘍を人生80年ではなく、たとえば150年生きたとして判断したらすべて転移するかも知れない。

病理診断はアナログ検査である。血液生化学査のように結果が数値で出るわけではない。人の目で判断し、診断するのである。従って、病理診断には揺れや幅がある。極端な事を言えば、同じ人でもその日に標本を見て判断したのと、翌日標本を見て判断したのでは異なることがある。難しい症例をその専門分野の複数の病理医に送って診断を仰いだ場合、診断が異なる場合がしばしばである。経験がものを言い、実際に沢山の症例を経験した人にはかなわない。病理診断は経験の学問で、“暗黙知”がものを言う。病理診断学の本をどれだけ読んでも、実際に標本を見ないと分からない。本はあくまでtoolにすぎない。本に書いてある“形式知”を利用し、実際に標本を沢山見ることが病理診断の暗黙知の形成となり、正確な病理診断に繋がる。それは、同じ病理診断でも症例ごとに微妙に異なり、1つとして同じ像がないからである。常に病理診断は新鮮で、いつも未知との遭遇である。これは病理医のモチベーションを保つのに大変有効と思っている。恐らく病理医は飽きることなく、わくわくとした興味尽きない気持ちで毎日病理診断をしていると思う。それにしても、医学部卒業生が何故に面白い病理に進んで来ないのか不思議である。私が着任後の新病理専門医は、一人の口腔病理専門医を含めて合計4名のみである。デジタルな医学教育に慣れた学生は、ほとんどアナログである病理診断学は古い遅れた分野と思っているのだろうか?人間の知識の根源はデジタルな“形式知”ではなく“暗黙知”で、よい臨床医になるのにもこちらが大切である。楽譜通りに弾くことができても、にわかによいピアニストにはなれませんからね。

研究を振り返って

泌尿器科学 教授 平尾 佳彦



教授在任中の研究を振り返ると、常に臨床現場への新規医療の導入に努め、教室関連施設との共同研究から課題を抽出し、基礎研究でその課題の解決にあたり、その成果を臨床現場で検証することを繰り返してきた。教室員と共にやってきた主な研究を以下に記す。

膀胱癌：膀胱癌については異所性膀胱移植モデルを用いて尿自体が発癌促進作用を有し、Epidermal growth factorを中心とした細胞増殖因子や炎症性サイトカインが関与していることを証明した。また、多施設共同研究を構築して大園誠一郎（浜浜松医大教授）を中心に治療自然史を解明し、再発防止には非可視癌病変の完全切除が課題と考え、protoporphyrin IXを標的とする光力学診断を導入した。同時に膀胱癌のp53がん抑制遺伝子の変異を世界で初めて報告した藤本清秀准教授を中心に、光力学診断で癌細胞を選択的に採取し遺伝子変異やDNAメチル化異常の解析を行うシステムを開発している（平成23年度戦略的基盤技術高度化支援事業）。

前立腺癌：前立腺癌患者は県下で2,449名（2007-09年集計）と増加し、田中宣道学内講師を中心に早期前立腺癌に放射線治療を積極的に導入し、同時に放射線感受性増強や去勢抵抗性メカニズム解明の基礎研究を行っている。また、疫学研究として大豆イソフラボンの介入試験を行い、抗アンドロゲン作用を有する代謝産物のEquolが化学予防に重要であることを国際的な研究において明らかにした。現在、Equol産生能を有する腸内細菌の検出と住宅環境の関連などの大規模な疫学研究を進めている。

腎細胞癌：関連施設を含めて1,000例以上の腎細胞癌症例を解析し、臨床症状、臨床病期とCRPを用いた奈良医大独自のリスク分類を提唱した。小径腎細胞癌にはマイクロ波組織凝固を用いた無阻血腎部分切除術を開発し、術後腎機能の評価にはCT/MRIを用いる機能的腎体積測定法を開発した。進行腎細胞癌に対しては、植村天受（現近畿大学教授）を中心に、MN/CA IXを標的にした世界初のペプチド免疫療法を確立し、臨床応用に至っている。

膀胱機能：排尿障害の症状増悪因子は、平山暁秀講師を中心に下部尿路閉塞による持続的高圧排尿はc-fiberの再活性化により過活動膀胱を惹起し、prostaglandinが関与することを明らかにした。夜間頻尿の主因は夜間多尿にあり、水分過剰摂取によるvasopressinの分泌や反応性の低下と、夕刻の下腿浮腫が原因になることを明らかにした。また、睡眠障害の影響の解明には、在宅脳波計簡易脳波睡眠診断法を開発し、高齢者の睡眠の質的診断を行っている。また、医療施設で行う排尿機能検査法は非生理的な検査法であり、在宅で膀胱機能を評価できる無線カプセル型圧センサ、携帯式尿流計と電子排尿日記を平成20-22年度都市エリア産学官連携促進事業で開発した（平成23年度日本泌尿器科学会総会賞授賞）。この開発には大阪大学と東京工業大学と共同して2.5mm角の双方向通信医療専用LSIを開発した。このLSIを用いて、本年度から地域イノベーション戦略支援プログラムとして種々の革新的な無拘束生体計測システムを開発する。

腎移植・血液透析：腎不全代替療法としての腎移植・血液透析は1970年代より、教室として積極的に取り組んできた領域である。吉田克法病院教授を中心に、年間12-18例の腎移植を実施すると共に、移植腎機能と血管作動性物質エンドセリンや透析膜制定適合性とマクロファージ活性指標ネオプテリンの関連を研究している。

産学官連携だより

ポリシー(産学官連携・知的財産・利益相反)が制定されました

本学における産学官連携の基本方針を定める“産学官連携ポリシー”及び産学官連携活動を進める上で必要となる知的財産の基本方針である“知的財産ポリシー”、リスクマネジメントの“利益相反ポリシー”が制定されました。概要は以下のとおりです。(本文は学内ホームページの規程一覧に掲載しています。)

●産学官連携ポリシー

近年、大学の使命として従来の高等教育を通じた「人材の育成」及び「高度の研究」に加えて「社会貢献」が求められるようになりました。本学は医学・看護学のみならず、従来は図1に示すような縦軸の“人材の育成”“高度の研究と医療”を通じて地域社会／人類の福祉に寄与してまいりましたが、第3の使命としての“社会貢献”と地方の医科大学としての“地域連携”が新たに求められています。この横軸の“社会貢献”及び“地域連携”の一形態として産学官連携があり、その基本方針が産学官連携ポリシーです。このポリシーに基づいて大学の組織的な産学官連携の取り組みを推進させ、大学としての使命を果たしていく必要があると言えます。



【図1】産学官連携のイメージ



【図2】知財サイクルイメージ

●知的財産ポリシー

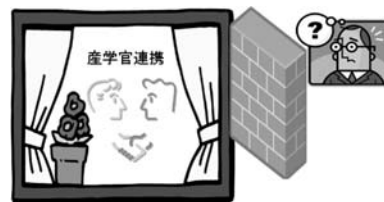
産学官連携は、大学において【創造】された研究成果を知的財産として適切に【管理】し、産学官連携活動を通じて社会に【還元】して役立てることであると言えます。

産学官連携活動によって図2のような知財サイクルを生み出し更に発展させるため、本学においての知的財産を取り扱う際の基本方針をポリシーとして定め、大学組織としての対応を内外に明らかにする必要があります。

●利益相反ポリシー

産学官連携の実施において大学本来の理念や使命と企業等の連携先との利害との衝突。あるいは、社会から本学に対する不信や疑念も想定されます。

利益相反ポリシーを定め、このポリシーに従って利益相反を適切にマネジメントすることを内外に明らかにし、本学としての説明責任を果たしていくことが、本学に対する信頼を維持していく上で非常に重要と言えます。



【図3】利益相反の不信・疑念イメージ

UNITT2011 第8回

産学連携実務者ネットワーキング参加報告

UNITT (産学連携実務者ネットワーキング) は、米国のAUTM に倣って、大学技術移転における諸課題について講師と会場が一体となって討議するセミナーとなっており、全国から大学及び企業等の産学連携関係者が集まるネットワーキングで、今回で8回目の開催になります。

今回は、「経済学者と考える産学連携とイノベーション」、「震災復興のための産学連携活動」、「知財本部やTLOの自立的経営」「デザイン及び人文社会科学分野の産学連携」等注目のテーマを取り上げる他、秘密管理に対する政府当局担当者によるプレゼンも実施されました。

本学からは、産学官連携推進センター係長の米坂がセッション名「中小規模大学における産学連携活動のあり方」においてスピーカー&デモレーターを務めるとともに、担当者1名も参加致しました。

以下、今回参加したセッションを報告いたします。

①「特許出願基礎講座」

知的財産権に関する基礎的知識や共同出願の際の留意点について紹介がありました。知的財産権には、特許権、実用新案権、商標権等があります。今後の産業発展のためには、大学で生まれた知的財産を限られた予算の中でマネージメ

ントすることが重要になってきます。また、企業等との共同出願の際には、発明者（特に学生）の取り扱いに留意する必要があります。

②「共同研究基礎講座」

本講座は今回で4回目になり、共同研究契約の基礎や企業と大学の交渉のポイントについて、九州大学の事例も取り上げながら紹介がありました。企業等と共同研究をする際には、証拠を残すためにも契約書の締結は必須です。また、企業と大学をWIN-WINの関係にするためには、お互い、妥協することが必要であり、九州大学では、企業の様々な要望に対応するために、誰に決定権を持たせるか細かい基準を作っている。

③「リサーチアドミニストレーター（RA）に求められること」

RAとは、研究者とともに研究活動を円滑に実施するために、公募情報の提供や申請書作成支援等を行う人のことです。アメリカではURAと呼ばれ、資格制度もあります。研究者を周辺業務（事務）から解放し、産学連携を推進するためにもRAの普及・定着が必要です。そのためには、RA個々のスキルを上げるだけでなく、その専門性が評価される環境を整備することが重要です。

④「中小規模大学における産学連携活動のあり方」

秋田県立大学、青森県立保健大学及び本学から取り組み状況の報告を行い、ディスカッションが行われました。

本学からは「奈良県立医科大学の産学官連携活動～2007年法人化後の歩み～」と題し、本学は、2007年の法人化直後は知財確保への予算と人材の投入はほとんどありませんでしたが、2009年の大学知的財産アドバイザー派遣を契機に、予算と人材が増えOJTが行われたこと、産学官連携活動を継続させるためには、担当者の能力開発やノウハウ伝承が必要で、その障壁となっていることとして、産学官連携以外の種々の業務も兼務していることと、3～5年の人事異動でスキルアップを業務に生かせない課題があることの報告を行いました。



2011.10.5(水) 6(木) 7(金) 10:00～17:00《展示会場》 パシフィコ横浜 ～第一内科学 齋藤教授によるシーズ発表～

BioJapanは1986年の初開催から今年で13回目の開催となる日本においてバイオ関連で最もインパクトのある展示会です。アカデミックシーズ発表会では卓越した大学の技術シーズを基礎に産学協同研究および技術移転の加速をはかるべく、各大学・研究機関が最新の研究成果の披露を行います。

このアカデミックシーズ発表会において本学の第一内科学齋藤教授が“血栓溶解薬剤 DDS”に関する技術の発表をおこないました。発表が最終日の7日（金）と言うことで参加者はやや低調でしたが、参加された製薬企業の担当者から質問もなされました。また、会場のポスター展示ブースで展示を行い、来場者に対して研究推進課 産学連携推進係長（産学官連係推進センター係長）米坂から説明を行ってまいりました。

このような機会を活用した新たなパートナー開拓が産学官連携を進展させ、研究活動のさらなる発展につながることを期待されます。

次回は、2012年10月10日（水）～12日（金）パシフィコ横浜で開催されます。新たなアライアンス先の探索を希望されるシーズ情報をお持ちの研究者は研究推進課産学連携推進係（内線2552）までご一報ください。



【アカデミックシーズ発表される齋藤教授】

Technology Summary
New Drug Delivery System for Intravenous Coronary Thrombolysis

Description
Quick coronary revascularization is essential for the treatment of acute myocardial infarction (AMI). Intravenous coronary intervention (PCI) is recognized as the standard therapeutic strategy for AMI but it's time consuming. The thrombolysis method is still the advantage of minimal invasiveness and speed compared to PCI. However, there are several drawbacks in the current thrombolysis method such as the low reperfusion rate and the occurrence of hemorrhagic complications.

Potential Application
This invention is related to an immediate initiation of therapy in ambulance. This can be used for not only AMI but also stroke, pulmonary embolism, and deep vein thrombosis. It is applicable for patients with higher risk of hemorrhagic complications.

Advantage
1. Multi higher rate of thrombolysis (90%) compared to the conventional method (70%) in acute AMI treated within 30 minutes (Fig. 1).
2. Targeted delivery to the site of thrombus (Fig. 2).
3. Shortly of PFA activity (50% in vitro, 70% in vivo) at the target area (Fig. 3).
4. Complete recovery of PFA activity by intravenous PFA-able reduction of hemorrhagic complication due to R3 and R4.
5. Current PCI is feasible for coronary revascularization but takes time to deliver the patient to emergency room and to begin coronary treatment. This is time consuming and expensive. American heart association recommends to reach door to balloon time to less than 90min. The door to balloon time from stroke center to patient care and the time from patient care to start thrombolysis treatment can after the onset of emergency medical services in the ambulance. So "door to balloon time" becomes 0, and time high cost effectiveness.

Fig. 1 Thrombus-targeting Health Type DDS

Fig. 2 PFA-able reduction of hemorrhagic complication

Fig. 3 Complete recovery of PFA activity by intravenous PFA-able reduction of hemorrhagic complication

Fig. 4 Current PCI is feasible for coronary revascularization but takes time to deliver the patient to emergency room and to begin coronary treatment.

Patent: JP 2010-10333
Invention Name: complex of fibrinolytic agents
Inventor: Tomohiko Saito, etc.
Applicant: Nara Medical University

Nara Medical University
Kansai TLO Co., Ltd.
Kansai Technology Strategy Organization

Current
11000 Nara, Nara
021-716-0000 (Nara) / 021-716-0000 (Tokyo)
TEL: +81-52-525-5850 FAX: +81-52-525-5851

【展示ポスター】



「チーム医療を担う高度・専門スタッフの養成」

本院では、周術期におけるチーム医療を担う高度・専門スタッフの養成に取り組んでいます。その第一歩として、医療技術の進歩による医療機器の多様化・高度化に対応しうる臨床工学技士の専門性を周術期チーム医療に活かすため、臨床工学技士の麻酔アシスタント業務に関する高度医療技術修得者の養成を行っています。

昨年6月からスタートした「麻酔アシスタント業務に関する臨床工学技士の高度医療技術修得のための研修プログラム2010～2011」は、日本麻酔科学会編「周術期チームテキスト」を基準とし、麻酔指導医の指導による実習(OJT)を中心とした1年を通じた研修です。

この度、1期生として医療技術センターの臨床工学技士2名(杉本浩士技師、川西秀明技師)が、この研修プログラムを修了しました。高度医療技術修得者養成認定審査委員会の認定審査を経て、9月1日、病院長から認定証が交付されました。



榊附属病院長から認定証を交付される杉本さん(左)と川西さん(右)

ペインセンターの設立にあたって

ペインセンター長 古家 仁
副ペインセンター長 橋爪 圭司

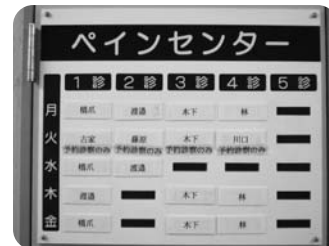
痛みは、身体に生じた異常事態を知らせる警告反応として大切な役割を持っています。しかし、警告の役割を終えた痛みが長く存在すると、より強い痛みや新しい痛みが現れてくる、いわゆる痛みの悪循環が生じます。このような状態に陥った時はもちろんのこと、陥りそうな時には、身体的や精神的な苦痛を適切に緩和することがとても重要になります。

以前より麻酔・ペインクリニック科外来として、痛みを苦しんでいる方々の治療を行ってきましたが、この度「ペインセンター」として新たな一歩を踏み出すこととなりました。

ペインクリニック専従医3名をはじめとする医師7名と看護師3名のスタッフ10名で、毎日診療を行っています。対象疾患は頭痛、顔面痛、頸部痛、腰痛、関節痛、帯状疱疹などの全身の痛みやしびれ、痛み以外にも末梢循環不全、脳脊髄液減少症など多岐にわたります。

当センターでは専門的な知識と技術をもとに、症状や身体所見から痛みの原因を診断し、適切な検査や治療を行います。治療は神経ブロック療法や薬物療法などの様々な方法を用いて行っています。これらの治療を行えるのも他科の先生や各部門のスタッフの方々のご協力があるから可能な事です。この場をお借りしてお礼申し上げます。

今後も皆様方にはご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



(財産管理課)

患者さん、職員のための施設改修

～外来ドア及びトイレの機能向上～

附属病院外来1階2階診察室等の入口を患者さんが容易にご利用できるようスライド・ドアに改修します。10月に降に優先順度が高く、かつ、設置可能なところから着手し、診察に支障が無いように土日祝で工事です。

事前調査・準備・工事についてご協力をお願いします。(写真は昨年度の小児科設置例)

また、管理棟3階の男女トイレについても、便器の洋式化と床・壁・天井・衛生機器等の全面的な改装工事を行っています。工事期間中は管理棟2階、または、医局棟のトイレをご使用くださるようご協力をお願いします。

今後は3階に引き続き2階トイレと医局棟のトイレも改修を予定しています。

大学については、一般教育校舎3階と基礎医学校舎5階の男女トイレの改修が終わりました。基礎医学校舎の残り3、4階のトイレ改修は、来年度以降に行う予定です。



看護学科生、チェンマイ大学で楽しく学ぶ



2011年度看護学科の選択科目である国際看護論Ⅱ（新カリキュラム3年生）および国際看護論（旧カリキュラム4年生）の海外研修を、8月15日から21日までの7日間にわたって、本学の交流協定校でもある、タイのチェンマイ大学看護学部で実施した。受講学生は19名、引率教員は本科目担当教員の山名香奈美（母性助産学）と勝井伸子（英語）の2名であった。チェンマイ大学での海外研修は2007年度から実施しており、国際看護論Ⅰ（3年生必修科目）に続く選択科目として開講されている国際看護論Ⅱ、および国際看護論（4年生通年選択科目）の重要な部分として、実施した。

事前の文化人類学的な視点からのタイ文化理解に関する講義、および英語で実施される講義・見学のための語学研修の授業を経て、チェンマイ大学では、タイにおける「医療制度」「看護教育」「HIV/AIDS」「精神医療」「救急医療」「伝統医療・補完代替医療」「小児医療」に関する講義と、それぞれのテーマに関する臨床現場の見学を行った。見学施設は、大学の医療施設・大学施設だけでなく、タイの集落に設置されているプライマリヘルスケアセンター、寺の中に設置されている伝統医療センター、古い北部タイの伝統医療教育を行っている伝統医療センター、HIV/AIDS患者の自助活動団体、北部地方最大の精神病院なども含んでおり、講義で聞いたことを実際の現場へ行って見学し、伝統医療などは実際の手技を体験し、古い伝統医療の資料なども現物を見ることができるといった貴重な経験を得ることができた。受講生たちは非常に積極的に講義・見学に参加し、活発な質問が移動のバス内でも続くほどで、それぞれを担当していただいたチェンマイ大学看護学部の教員の先生方も「奈良医大の学生はinquisitiveでintelligentである」と感銘を受けておられた。

地域看護学実習で山間部への実習が始まる!



今年度から、地域看護学実習では山間部の市町村実習が開始され、そのひとつとして、9月7日から東吉野村役場に行きました。様々な職員の方にお話を聞かせていただいたのですが、役場と各関係機関、各地区会長さん方との連携が密にはかれており、役場と住民の方とのつながりの強さや、信頼関係が築かれていると感じました。

そして、職員の方が住民のよりよい生活・健康を目標にさまざまな事業を住民とともに企画し、いつまでも元気で明るく、お互いを支えながら暮らせる村づくりを行っていることがわかりました。高齢化に伴う厳しい現状はありますが、それによる課題に対して、村全体で対策を考え助け合いながら生活していることを学ぶことができました。

看護現場の体験を振り返って～夏期看護学生アルバイトの感想～

本学看護学科学生が夏休みを利用し、看護の現場を体験しました。看護実践（バットメイキング、足浴など）の他、学科実習ではなかなか体験できない患者さんやご家族と接する機会があり、新しい発見や学びがたくさんあったようです。

あなたも、来年度、参加してみませんか・・・？

【参加した学生の声】

○看護学科1年 藤井 麻衣



夏休み、附属病院で2週間ほど夏期学生アルバイトをさせていただきました。短期間ではありましたが、その中にはかけがえのない経験を得ることができました。机上学習や実習とは違った学びもあり、看護のやりがいやおもしろさ、そして難しさや厳しさも実感することができたと思います。責任の重さなどにくじけそうになったとき、支えとなった医療スタッフの方々の気遣い、そして患者の方々のあたたかい言葉は、今でも忘れることはありません。

私は看護学科に入学して半年と経ちませんが、看護師という夢に対して自信が持てなくなることもありました。しかし、今回、実際に医療に関わることで看護のやりがいを発見し、心からこの仕事がしたいと思えました。迷うことなく夢に進んでいくための、大きな一歩となりました。貴重な経験ができ本当に良かったです。

○看護学科1年 福山 久美子



私はこの4月に大学に入学し、看護についてほとんど知らない状態でアルバイトに参加したので、どんな仕事内容なのか不安でした。しかし、配属先の皆さんがとても親切に接して下さり、安心して働くことが出来ました。

私の仕事内容は看護助手業務の一部や看護師さんのお手伝いで、その中でも特に印象に残っているのが、病室掃除の際、患者さんに「ありがとう」と言ってもらえたことです。アルバイトでも医療の現場で働くなら、自分に出来ることを頑張りたいと思って取り組んでいましたが、「ありがとう」と言ってもらえた瞬間は、自分でも患者さんにしてあげられることを見つけた気がしてとても嬉しかったです。

私はこの先、看護師になるために学ばなければならないことがたくさんあると思いますが、患者さんに「ありがとう」と言ってもらえた時の気持ちを忘れずにこれからも頑張っていきたいです。

活躍する認定看護師

附属病院では、18名の認定看護師（日本看護協会認定）が、12の分野で活躍しています。今年度、新たに認定されたメンバーを紹介します。

皮膚・排泄ケア認定看護師



にしばやし なおこ
西林 直子（C病棟4階）

今年度、皮膚・排泄ケア認定看護師の資格を取得しました西林直子です。
附属病院では、すでに活躍されている前川和世皮膚・排泄ケア認定看護師に続き2人目となり、現在は泌尿器科・放射線治療科核医学科病棟に勤務しながら院内のWOC領域における看護を実践しています。WOC看護とは、創傷(Wound)・ストーマ(Ostomy)・失禁(Continence)に関わる看護です。健康を害した皮膚及び皮膚障害のリスクの高い脆弱な皮膚に対する予防的・治療的スキンケアを基盤とし、創傷治癒を促進する局所・全身管理を行っています。また、排泄は人間の基本的ニーズであり、身体の機能低下や社会生活を制限する排泄障害に対して苦痛を取り除き、尊厳を保ち、生きる意欲や人間らしさを取り戻せるよう支援しています。病棟看護師や医師、コメディカルなどさまざまな部署と連携をとりながら質の高いケアを提供できるようにしていきたいと思っています。

集中ケア認定看護師



ながた あきえ
永田 明恵（C病棟3階）

集中ケア認定看護師は、重症かつ集中治療を必要とする患者さんとそのご家族を対象としており、患者さんの病態変化を予測し重篤化の予防に向けた看護実践、および二次的合併症の予防・回復に向けた早期リハビリテーションを実践するための知識・技術を持つ認定看護師です。また、チーム医療の重要性がうたわれる今、人工呼吸器装着中患者の看護を中心とした呼吸ケアサポートチームの立ち上げなども担う立場にあります。
私自身、今後どのように活動すべきか模索途中にありますが、まず所属部署において対象となる患者・家族の反応を捉え、今どう対応することが適切であるのか、スタッフと共にアセスメントし、スタッフと共に実践していくことが重要であると考えており、それらの継続が看護の質の向上につながると信じ、日々の看護実践に取り組んでいきたいと思っています。

集中ケア認定看護師



やまむろ としお
山室 俊雄（C病棟7階）

集中ケア認定看護師は、クリティカルな状況での患者さんおよびその家族を対象に、専門的知識・技術のもと状態の把握、早期回復・症状改善へ向けた早期対応を行っています。
患者さんの状態が変化しやすい急性期看護領域では、何が有益で何が有害であるのかを的確かつタイムリーに判断する必要があります。しかし、重症患者さんの多くは自らの状態を十分に伝えることはできず、それを知ることは容易ではありません。見て、触れて、聴いて、感じる、背景までも含め、患者さんの些細なメッセージを見逃さない観察力。それは患者さんの生きようとする力を最大限に引き出す第一歩であり、集中ケア認定看護師の役割です。
安全・安楽はすべての患者さんの基本的ニーズです。クリティカルな状況であれ、早期退院を念頭におき、的確迅速な観察のもと回復を促進できる安全安楽なベッドサイドケアを充実するために管理者やジェネラリスト、看護スタッフや他職者とも連携を図りながら1歩ずつ進めていきたいと思っています。

緩和ケア認定看護師



まつむら かつよ
松村 勝代（B病棟6階）

がん患者さんは、がんの診断時から終末期において、身体症状や心理・社会的、スピリチュアルな苦痛を抱え、家族も同様の苦痛を抱えています。現在は、がん患者さんの多い、消化器・乳腺・小児外科病棟で勤務し、患者さんや家族が抱えるこれらの問題を評価し、主に心理・身体症状の緩和へのケア実践をしています。また、緩和ケアチームに依頼された患者さんを横断的にチーム訪問し、緩和ケアチームの一員としても活動しています。
今後は、「最後までその人らしく生きることを支える」ことを信念として、患者さんや家族が望むQOLについて、自身のスキルを活かしながらスタッフと共に考え、ケアの実践や指導・相談をしていきたいと思っています。そして、緩和ケアは終末期だけではなく、がんの診断時から治療と並行して提供されるケアであることを、医療者だけではなく患者さんや家族に対しても普及していきたいと考えています。

がん性疼痛看護認定看護師



なかもら のぶこ
中村 展子（C病棟6階）

今まで、多くのがん性疼痛で苦しむ患者さんを見てきました。その中で何か手を差し伸べられないのかと思い、2011年7月、『がん性疼痛看護認定看護師』の資格を取得しました。
がん性疼痛緩和において、医師は鎮痛剤を処方できます。看護師は、痛みによって影響される日常生活を援助し、修飾されるさまざまな苦痛を緩和できるように看護技術を提供します。患者さんの側に一番近い看護師だからこそ、患者さんやご家族の声を聴き、触れることで、痛みに気づき、痛み以外の細やかな点にも手を差し伸べることができます。
さらに、がん性疼痛認定看護師には、痛みを有する患者に関する知識を高め、薬剤と薬理作用について理解し、それらを適切に使用し、効果を評価することが求められています。また他の看護職に対して、実践的モデルとして、指導・相談・対応することです。

痛みの治療は、患者さんやご家族の方にとって手術や抗がん剤治療と同様に大切な治療です。医療チームの中で、他職種と協力しながら、がん性疼痛の緩和活動をしていきたいと思っています。

所属紹介

A病棟6階南

メディカルバースセンター

奈良県中南和地区で安心して出産できる環境を整備し、総合周産期母子医療センターとの役割分担を行うことにより、各々の機能の充実を図ると共に助産師の研修センターとしての役割をになう目的で、2011年1月開設しました。

助産師は、法的に正常な経過の妊娠・分娩・産褥に関しては、医師の関与なしに、介助を行うことができます。メディカルバースセンターでは、助産師が主体となって、『自然性を尊重し、安心・安全なお産を目指すとともに、新しい家族形成への援助をします。』の理念のもとに、本来女性の持つ生む力を最大限に発揮できるように、明るい笑顔と、誠意ある対応を心掛け、寄り添った助産を提供できるよう努力しております。

また、ご家族が安心して、新しい家族を迎えられるように、チーム医療の充実に最善を尽くしてまいります。

現在スタッフは、経験5年以上の助産師7名で、助産外来（妊婦健診）・分娩介助・産後の母児ケア・退院後健診・授乳ケア外来など行っています。分娩時は、A病棟5階助産師と、チームを組みます。開設から半年が経過し、約50人の新しい命が誕生しています。「出産に立ち会ってよかった」という夫の声「おっぱいが良く出るようになった」「何か有れば、医師がすぐ近くにいるから安心」「またここで産みたいです。」などのうれしいお声をいただいています。今後みなさんと喜びの中で、たくさんの新しい命を迎えられるように、取り組んでいきたいと思えます。職員の皆さんも妊婦さんになりましたら、是非ご活用下さい。



A病棟4階

総合周産期母子医療センター・新生児部門

新生児集中治療部（NICU・GCU）では、ハイリスク新生児に対して、母体部門と連携し、24時間対応で高度・専門医療を行っています。近年、新生児医療の進歩に伴って、早産児の生命限界は大きく広がり、在胎22週の生存例もまれではなくなりました。このような「小さな命」と向き合う私たちは細心の医療を施し、後遺症の無い生存をもたすべく力を注ぐことはもちろんですが、ご両親に寄り添い出来る限り不安を軽減することも重要です。

所属の基本方針として

- ①親子に安心で優しい、質の高い医療を提供します。
- ②児の成長や家族の絆を大切にし、家族のスタートを支えます。
- ③退院後も発育発達を応援します。

の3つの柱を大切にしています。NICUは赤ちゃんにとって機械に囲まれ、自然な環境ではありません。しかし、赤ちゃんや家族の絆がゆっくり育つようなNICUになるように細やかなケアを提供し、努力していきたくと思っています。



A病棟5階

総合周産期母子医療センター・母体部門

総合周産期母子医療センターの母体部門として、平成20年開設されました。県の中核病院として、合併症を持つ母体や、分娩の異常、胎児・新生児の異常に対して、新生児部門と連携を取り、24時間体制で受け入れています。MFICU6床と産科27床の中、助産師30名・看護師5名の35名のスタッフで、パワフル師長とフレッシュな主任2名を中心に働いています。医師とも仲良く、明るく楽しい職場です。産科救急という緊迫した時もありますが、『オギャー』という赤ちゃんのうぶごえ大合唱の中で、日々癒されています。

ハイリスクはもちろんですが、正常分娩も行っています。2つの命とその家族を守るという大変やりがいのある職場です。



医療倫理講習会を開催

9月6日(火)、医療倫理講習会を開催しました。

この講習会は、「臨床研究に関する倫理指針」に規定される「研究者は、臨床研究の実施に先立ち、臨床研究に関する倫理その他臨床研究の実施に必要な知識についての講演その他必要な教育を受けなければならない」の一環として開催いたしました。

今後毎年1～2回程度開催し、本学研究者の倫理的観点の更なる向上につなげていきたいと思っております。

講師：東京医科歯科大学 生命倫理研究センター

センター長・教授 吉田 雅幸 先生「これからの医学研究に必要な研究倫理審査の在り方」



※ 当該指針は右記URLからダウンロードできます。 <http://www.mhlw.go.jp/general/seido/kousei/i-kenkyu/index.html>

「医の倫理委員会」からお知らせ

○ 医の倫理委員会開催月日 原則として奇数月の第1火曜日13:30～

※ 審査申請書は、遅くとも開催日の約1月前迄に事務局の研究推進課へ提出してください。

「女性研究者研究活動支援事業」が採択されました

今年度の文部科学省、科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」の選定機関に本学が決定されました。この事業は、女性研究者がその能力を最大限発揮できるよう、出産・子育て等のライフイベントと研究を両立するための環境整備を行う取組に対して補助されるものです。本学では、女性研究者支援センターが中心となって、ライフイベント中の女性教員への研究補助員の配置、相談体制の整備やハラスメント防止のための意識啓発などに取り組むこととしています。

《お問い合わせは、女性研究者支援センター「まほろば」(内線2224)まで》

奈良県

教職員のための夏の公開講座を実施しました

奈良県教育委員会では、夏休みを中心とする「長期休業期間等」を有効活用して、県内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教職員の資質や能力の向上等を目的とした研修の充実・強化が進めています。

本学では社会連携を推進するという趣旨から、平成15年度から各教室の協力を得て、「教職員による夏の公開講座」を開催してきました。

今年度も、4名の教授のご協力をいただき、下記のとおり開催いたしました。

受講対象：県内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教職員

日時・内容・講師等

- ① 7月29日(金) 14:00～15:30 「健康における睡眠の役割」 第二内科学 教授 木村 弘
- ② 8月 5日(金) 13:30～15:00 「現在の日本における寄生虫症」 病原体・感染防御医学 教授 吉川 正英
- ③ 8月26日(金) 10:30～12:00 「大学での生物教育」 生物学 教授 永淵 昭良
- ④ 8月29日(月) 10:00～11:30 「子どもの言動から心を理解する」 精神看護学 教授 軸丸 清子

公開講座 「くらしと医学」を開催しました

今年度前期の公開講座を、9月10日(土)に奈良県橿原文化会館大ホールにて開催しました。

平成6年度から始まったこの講座も、今回で27回目となり、今回の会場である文化会館での開催も10回目となりました。

当日は、約320名と多くの聴講者を得て次のとおり進められました。



吉岡学長あいさつ

- ◇ 吉岡学長あいさつ
- ◇ 講演
- ① 瀬川睦子成人看護学教授 「家族とともにいる緩和ケア—自分らしさの支援—」
(座長：野々村昭孝 病理診断学教授)
- ② 高木都第2生理学教授 「マウスES細胞—排便障害治療への可能性—」
(座長：羽竹勝彦 法医学教授)
- ③ 野々村昭孝病理診断学教授 「メタボリックシンドロームと肝臓
—脂肪肝から肝硬変・肝臓癌へ—」
(座長：瀬川睦子 成人看護学教授)

聴講者はメモを取るなど、熱心に聞いていました。また、日ごろの悩みなど、多くの質問もありましたが、演者の適切な回答に納得していました。

公開講座は、本学の地域貢献の一環として、「くらしと医学」をテーマに、広く県民の方々に、医学・看護学の知識を解りやすく解説し、日々の暮らしに役立てていただくことを目的としています。23年度後期は、平成24年3月10日(土)奈良県文化会館で開催の予定です。



瀬川教授



高木教授



野々村教授

Report

承認された規程、委員会名簿等については、随時、ホームページにて公開しています。

学内ホームページURL（閲覧は学内のみ可能）

<http://top.naramed-u.ac.jp/> → 「規程・名簿タブ」

※：公開ホームページに掲載

<http://www.naramed-u.ac.jp/aff/johokoukai/>

(総務課)

役員会及び教育研究審議会の報告

第12回 役員会（7月6日）

- 1 教育研究審議会案件について承認
- (1) 教員の人事について承認
- (2) 医学科入試改正案について承認
- 2 職員の採用計画について承認
- 3 文部科学省「女性研究者研究活動支援事業」の補助申請について報告
- 4 奈良県立医科大学学術研究奨励会の解散について報告
- 5 発明変更届について報告
- 6 (仮称) 中央手術棟の整備について報告

第4回 教育研究審議会（7月7日）

- 1 教員の人事について承認
- 2 臨床教授等の選考について承認
- 3 奈良県立医科大学学則の改正について承認
- 4 医学科入試改正案について承認
- 5 平成22年度決算の承認について報告
- 6 平成22年度計画の評価について報告
- 7 文部科学省「女性研究者研究活動支援事業」の補助申請について報告
- 8 奈良県立医科大学学術研究奨励会の解散について報告
- 9 発明変更届について報告

第13回 役員会（7月13日）

- 1 職員の採用計画について承認
- 2 今後の収支見込について報告

第14回 役員会（7月20日）

- 1 教育研究審議会案件について承認
- (1) 奈良県立医科大学附属図書館利用規程の一部改正について
- 2 (仮称) 奈良県立医科大学附属病院 高度医療技術修得者養成認定制度(案)について報告

第15回 役員会（8月3日）

- 1 教育研究審議会案件について承認
- (1) 研究用コンピュータネットワーク運営管理規程の廃止及びICT活用委員会運営規程等の改正について
- 2 懲戒諮問委員会の設置について承認
- 3 職員採用試験（看護職員・臨床検査技師）の合格者決定について承認
- 4 なかよし保育園の整備について報告
- 5 財務状況(6月末現在)について報告
- 6 平成23年度オープンキャンパスについて報告
- 7 災害ボランティアについて報告
- 8 新棟建築にかかる医療安全の提言について報告

第16回 役員会（8月17日）

- 1 教育研究審議会案件について承認
- (1) 教員人事について
- (2) 中期計画及び平成23年度年度計画 重点的に進捗管理を行う項目
- (3) 「奈良県立医科大学ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会規程」の改正(案)について
- (4) 奈良県立医科大学大学院学則等の一部改正について
- 2 なかよし保育園の運営案について報告
- 3 共催名義の使用について報告

第17回 役員会（8月24日）

- 1 寄附講座教員の発令について承認
- 2 特任教員の配置について承認
- 3 健康管理センター所長の公募について承認
- 4 看護職員採用試験の合格者決定について承認

第18回 役員会（8月31日）

- 1 教育研究審議会案件について承認
- (1) 特任教員の人事について
- (2) 奈良県立医科大学学則の改正について
- (3) 学位申請に伴う外国語試験検定料の徴収について
- 2 職員採用試験の応募状況について報告
- 3 平成23年度授業料減免審査結果について報告

第19回 役員会（9月7日）

- 1 教育研究審議会案件について承認
- (1) 教員の人事について
- (2) 海外留学の延長について
- (3) 病院教授について
- (4) 懲戒諮問委員会からの報告について
- (5) 組換えDNA実験安全委員会の委員選任について
- 2 看護職員採用試験の合格者決定について承認
- 3 平成22年度業務の実績に関する評価結果について報告
- 4 平成22年度財務諸表の承認について報告
- 5 平成23年度の財務状況について(7月末現在)報告
- 6 公的研究費の不適切な経理に関する調査について報告
- 7 (仮称) 中央手術棟の整備について報告

第5回 教育研究審議会（9月8日）

- 1 教員の人事について承認
- 2 病院教授について承認
- 3 海外留学の延長について承認
- 4 研究用コンピュータネットワーク運営管理規程の廃止及びICT活用委員会運営規程等の改正について承認
- 5 中期計画及び平成23年度年度計画 重点的に進捗管理を行う項目を承認
- 6 「奈良県立医科大学ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会規程」の改正(案)について承認
- 7 組換えDNA実験安全委員会の委員選任について承認
- 8 奈良県立医科大学附属図書館利用規程の一部改正について承認
- 9 奈良県立医科大学大学院学則の一部改正について承認
- 10 奈良県立医科大学学則の改正について承認
- 11 学位申請に伴う外国語試験検定料の徴収について承認
- 12 懲戒諮問委員会からの報告について承認
- 13 特任教員の選任について報告
- 14 平成22年度業務の実績に関する評価結果について報告
- 15 平成22年度財務諸表の承認について報告
- 16 公的研究費の不適切な経理に関する調査について報告
- 17 奈良県立医科大学大学院学則等の一部改正について報告
- 18 平成23年度授業料減免審査結果について報告

第20回 役員会（9月14日）

- 1 病院教授について承認
- 2 債権管理規定等の改正について承認
- 3 保育園長の採用決定について承認
- 4 会計監査人の選考結果について報告
- 5 女性研究者研究活動支援事業の採択について報告

第21回 役員会（9月21日）

- 1 特任教員の配置について承認

第22回 役員会（9月28日）

- 1 教育研究審議会案件を承認
- (1) 平成24年度 年度計画策定方針(案)
- (2) 平成24年度 予算編成方針(案)
- (3) 発明届について
- 2 公的研究費の不適切な経理に関する調査について(案)承認

奈良県医師会・同医学会総会が開催されました(総務課)

平成23年度奈良県医師会・同医学会総会が、7月9日(土)に奈良県医師会館で開催されました。

当日は、県内選出の国会議員等、関係団体の要職者29名の来賓のほか、永年医療に従事し、その功績が認められた被表彰者や出席会員を含めて135名が参加するなか、総会議事や各種表彰行事等を含む式典等が挙行されました。

奈良県医師会の塩見俊次会長と同医学会の吉岡章学会長から開会の挨拶が行われた後、学術に関して研究功績が顕著と認められる会員に対し、表彰が行われました。

本学からは3名と奈良県立奈良病院の1名が奈良県医師会学術奨励賞を授与いたしました。

内科学第一教室 岡山 悟志

「心臓MRIによって検出された乳頭筋延延造影の1枝の陳旧性心筋梗塞例における臨床的意義」

小児科学教室 林 環

「小児心臓対外循環ポンプ手術における術後出血量の包括的凝固検査による予測と手術時間との問題について」

生理学第二教室 松吉ひろ子

「セロトニン受容体の消化管壁内神経における新しい役割」

整形外科 磯本 慎二

「同種間移植時に用いられる免疫抑制剤が骨髄間葉系幹細胞の骨形成能におよぼす影響」



「なかよし保育園」が新しくなります

法人の事業所内保育所「なかよし保育園」は、様々な職種の教職員の子供が入園していますが、建物は昭和44年の建築で、老朽化がすすんでいました。

一方、法人化後、経営改善に資するため、看護師をはじめとして職員採用を積極的に推進してきました、その結果、職員の子育て支援のニーズに現保育所が十分に対応出来なくなってきていました。

これらのことから、今年度、保育所の整備事業に取り組んでいます。

整備の主な内容は、園舎を現保育所の北隣接地に建て替え、園舎の面積を約98m²から約460m²に拡張します。施設内容としては保育室(4室)、乳児室(2室)、多目的室、厨房、安静室、事務室を計画しております。

また、定員は18名から最大60名(平成24年度は40名)に、入園年齢も満4歳までを小学校就学前までに引き上げる等、利便性の向上を図ります。

なお、現在は設計業務を実施しており、今後、文化財発掘調査等の手続きを経て、12月から工事にとりかかり24年3月中の完成、4月から新園舎における保育の開始を予定しております。

保育園を充実させることにより職員が子育てをしながら安心して働ける職場環境を整備し、職員のワークライフバランスの実現を支援して参ります。

保育園に関するご質問等については、お気軽に総務課担当(内線2206)までお問い合わせください。

下ツ道

(編集後記)

紀伊半島に記録的豪雨をもたらした大型の台風12号、それに続く台風15号により奈良県での被害も大きく河川や土砂災害への警戒がまだ続いています。

この半年の間に東日本大震災、大型の台風が立て続けに発生し、自然の驚異を思い知らされました。

○今村 知明(健康政策医学)
 笹平 智則(分子病理学)
 藤本 雅文(物理学)
 坂東 春美(地域看護学部)
 錦 三恵子(看護部)
 岡 眞啓(研究推進課)
 永井 淳(学務課)
 奥田 稔(病院管理課)
 前 和之(総務課)
 池田 眞琴(総務課)
 (○印は編集委員長)

掲載希望の記事等については、各編集委員までお知らせください。

OSCEにも小児科研修にも最適なモデル ドクターフォネット NEO No.188

① ステンレス製のチェストピースと耳管

② 誰の耳にも合わせられる聴診器

- 動く耳管
- 回転ソフトイヤークラス
- ソフトでしなやかなスライド式の2枚バネ

※丈夫なバネに自信あり
 万が一のバネ折れは10年間保証いたします。

③ OSCEに適したダブル聴診器

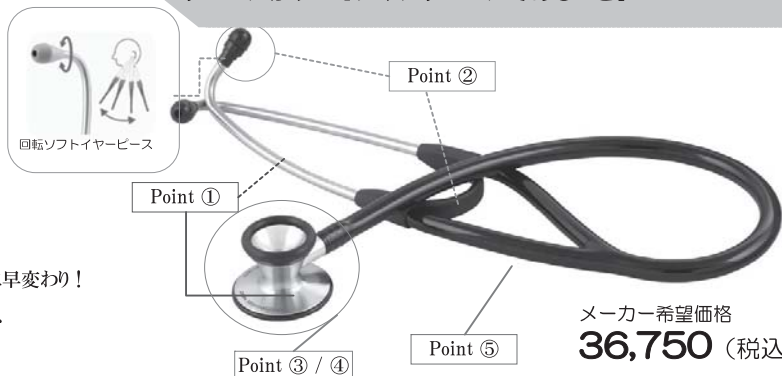
④ 小児科研修に対応した聴診器

ディスクとベルの交換によって小児用聴診器に早変わり!

⑤ 音の干渉を防ぐ、ツーインワンチューブ

聴診器選びの5つのポイント

ステンレス製の聴診器であること。
 自分の耳に合うもの、合わせられる構造であること。
 OSCEに対応した、ダブル聴診器であること。
 小児科研修に対応した聴診器であること。
 チューブがツーインワンチューブであること。



メーカー希望価格
36,750 (税込)

広告

株式会社スズケン 奈良営業部

このページに広告を掲載しませんか? くわしくはこちら → <http://www.narmed-u.ac.jp/gakuho/>